特集 DIGITAL RADIOGRAPHY NOW & FUTURE 2024

診療現場を革新する 動画対応DRシステムの最新動向

さらなる高精度，低侵襲な診断・治療に向けた技術とその臨床応用

企画協力：市田隆雄
大阪公立大学医学部附属病院
中央放射線部技師長

動画対応DRシステムは，血管造影検査からインターベンションへとニーズが拡大しました。ハードウエアの高機能化と多様なアプリケーションの開発により，ハイブリッド手術など，高度な治療に欠くことできないモダリティとして，高精度の手技を支えています。本特集では，医用画像活用の動向を整理した上で，動画対応DRシステムの役割を取り上げ，実際の診療現場における事例を紹介します。さらに，動画対応DRシステムにかかわる技術にも焦点を当てます。

I 総論

ハードとソフトの融合が導く動画DRシステムの最前線
――働き方改革・技術革新の潮流の中で

市田 隆雄 大阪公立大学医学部附属病院中央放射線部

本企画を通じて，2014年より2年ごとに動画DRシステムとそれを取り巻く環境を紹介してきた。その記事からは，企業が技術開発にしのぎを削り，臨床におけるユーザーの選択肢を日々増やし続ける様子，ユーザーがシステムに搭載される機能のすべてに着眼し，臨床において新しい活用を模索する様子が垣間見える。これは，動画DRシステムというハードと，その活用というソフトの融合が，臨床に成果を還元させる過程であり，その成果を基として沸き起こる潮流との考え方もできる。

他方，医療における喫緊の課題として取り上げられているのは働き方改革であり，監督官庁からの発出に基づくさまざまな動きも近年では顕在化し活発になっている。つまり，これまでは機器の開発というハードを主体として進歩してきた動画DRシステムであったが，ユーザーの働き方というソフトの影響を色濃く受ける時代となったということである。

本稿では，総論として動画DRシステムを取り巻く環境の変化を示し，それに沿っての考察をしてみたい。

医療技術職の呼称

かつての医療技術職の総称は「パラメディカル」であった。接頭語「para-」の意味は，医療を補助（補強や側面との意）するとの考え方に基づくもので，これが業界に浸透していたが，諸事情で呼称が変化することになる。1982年に，東京慈恵会医科大学の阿部正和先生の提唱で，協力や共同を意味する接頭語「co-」を用いた「コ・メディカル」と呼ばれるようになる。その後，2000年を過ぎた頃からは，チーム医療推進の機運が

〈0913-8919/24/￥300/論文/JCOPY〉